

適性検査型 I

注 意

- 1 問題は 1 のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は四十五分で、終わりは午前九時三十分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受験番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

明法中学校

次の文章を読み、あとの問題に答えなさい。

(*印のついている言葉には本文のあとに「注」があります。)

新刊書店を辞めてひとりで本屋をやろうと決めて、古本屋を始めました。どうして古本屋なの？　と思うでしょうか。新刊書店で働いていたのだから、独立して新刊書店を始めるのがふつうじゃないの？　だいたい「新刊」とか「古本」とかって何？

新刊書店の「新刊」とは、「出たばかりの本」のことではありません。出版社がつくった本を、取次*とんやと呼ばれる問屋から仕入れて、定価で売る。これが新刊書店です。取次を通さず出版社と本を直接やりとりすることも、まれにあります。どちらの場合でも、新刊書店は出版社や取次と契約を結んで、本の仕入れや値段について取り決めます。この取り決めがあるため、新刊書店では全国どこでも同じ値段で本を売っています。たとえ傷んでいても、値引きされることはふつうありません。

では古本屋の「古本」とは何かというと、これ以外の方法で仕入れた本すべてです。人から売ってもらった本、古本屋*どうしの市で買った本、別の古本屋で買った本、みんな古本です。道で拾った本をきれいに拭いて、値段をつけて並べてもいいのです。今日発売された本を新刊書店で買って、読んですぐ店に出してもかまいません。これも古本です。仕入れの方法がたくさんあり、自由に値づけでき

るのが古本屋です。

私が新刊書店を始めなかった一番の理由は、お金がかかりすぎるからです。

新刊が一冊売れたとき、だいたい売上の七割を出版社、一割を取次、二割を書店がとります。つまり、書店は千円の本を八百円で仕入れて、二百円の利益を得ます。この比率はほぼ固定されています。

古本だとどうでしょうか。どこから仕入れるか、いくらで売るか、決めるのは店主です。拾ってきた本を千円で売ってもいいですし、十円で買った本を十二万円で売るのも二十万円で売るのも自由です。買う人がいるならば、工夫*くさうしだいで新刊よりも利益率を上げることができます。

新刊書店を始めするには、そして続けるにはたくさんのお金がいります。最初に何百万円*なんびやくまんえん分もの本を仕入れて、その後は家賃、光熱*ほら費、人件費、仕入れ代、備品代などを、売上の二割の利益から毎月払*はらっていかねければなりません。いつも新しい本を入れていなければお客さんは来てくれませんから、たくさん売ってたくさん仕入れる循環*じゆんかんが必要*です。あちこちに大型書店があり、インターネットでも本が買え、そして本の売上が減り続けている今の時代に、店を回*まわしていくのは簡単なことではありません。

新刊書店には人も必要です。毎日入ってくる本や雑誌を棚*たなに並べ、不要な本は箱*はこに詰めて取次に返品し、出版社に電話やFAXで注文

をし、お客さんの問合せに答え、レジを打ち。ひとりですべてやっている新刊書店もありますが、相当に要領がよくなければできないでしょう。私など一日でパンクしてしまっただけです。

* 個人が取次と契約を結ぶには厳しい条件を課されるらしく、いま、チェーン店以外の新刊書店が新たにオープンすることはめったにありません。誰かが本屋を始めた、と聞くのはほとんどが古本屋です。

古本屋であれば、自分の手持ちの本や友人知人の本をかき集めて、勝手に始めることができます。また、古本屋は出版社や取次とのやりとりもなく、店主はいつも悠々と座っているイメージがあります。少なくとも、新刊書店のように常に新しいものを追いかけて時間に追いまくられることはないでしょう。

そんなわけで、「新刊書店と古本屋、どっちにしよう？」と迷うまでもなく、「本屋をやるなら古本屋しかない」と思いこんでいたので、あっさり決めたのでした。

もちろん、古本屋には古本屋なりの大変さがあります。

* たとえば、新刊書店のようなベストセラーがない。新刊は、新聞やテレビで話題になって、同じ本が一日に何十冊も売れることがあります。古本の在庫はふつう一点一冊なので、同じ本を大量に売ることにはできません。

* 雑誌や巻数もののマンガのように、定期的に売れる商品も古本屋

にはありません。本とお客さんとの出会いはいつでも一度きりで、一対一です。

また、新刊の仕入れには「委託」という方法があります。出版社から取次を通して本を仕入れて、売れなかった分は四ヶ月以内なら出版社に返品できるといえるものです。納品と返品をくり返せば取次への支払いを相殺できますし、返品できれば不良在庫を抱えずに済みます。本を入れ替えることで、売場も新鮮になるでしょう。

古本はふつう仕入れたらすぐに代金を支払わなければならず、返品もできません。業者どうしの市ならほかの業者より高値をつけ、お客さんからの買取なら相手が納得する買取価格を提示して、現金で払います。いま見送ったら同じ本には二度と出会えないかもしれないので、たとえ資金に余裕がなくても買います。そうやって必死に仕入れた本が何年も売れ残って店や倉庫を圧迫している、という悲しい事態もよく起こります。

新刊は定価が決まっていますが、古本は店によって、また本の状態によって価格が違います。最近ではインターネットでの古本販売が一般的になり、検索すれば誰でも古本の価格を比べられるようになりました。そうなれば、安いほうから売れていくのが道理です。このため値下げ競争がどんどん激しくなっていて、どこにもあるような本は値崩れを起こしています。町のごくふつうの古本屋には、厳しい時代です。

ここ何十年もずっと、「本が売れない」「若者が本を読まない」と言われ続けています。出版業界の売上は右肩下がりのに、チェーン店は大型店舗をどんどん出し、個人経営の小さな書店は閉店しています。もちろん古本屋も例外ではありません。

それなのに、新しく古本屋を始める人は、今もあとを絶ちません。昔なら定年退職した人が趣味をかねて開店するイメージがありましたが、最近は若い人もたくさんいます。新聞や雑誌でもたびたび若い古本屋店主が紹介されています。なぜ、時代に逆行するような仕事を選ぶのでしょうか。

見ていると、そして私自身のことを考えると、「あえて逆行したのかな」という気がします。あるいは、逆行せざるをえないのか。*
 会社の一員としてバリバリ利益を上げるとか、世界を股にかけて活躍するとか、そういう大きなことがしたくない、というよりはできなくて、世の中の流れから離れるために古本屋になったのかもしれない。*
 ません。

古本屋の大変さは、自由さと裏表です。必ず置かなければいけない本はなく、買い取りたくない本は断つてもいいし、本には好きな値段をつけられます。出版社や取次と交渉することもありません。新刊書店と違って、ルールはほぼないと言っているくらいです。

『本屋になりたい この島の本を売る』宇田智子

〔注〕

問屋	商品	商品を店に売り渡す商店。
定価	決まっている値段。	
市	品物を売ったり交換したりする場。	
利益率	もうけや収益の割合。	
光熱費	電気やガスなどにかかる費用。	
人件費	給料など、労働に対して支払う費用。	
備品代	物品にかかる費用。	
パンク	集中しすぎて動かなくなること。	
チェーン店	共同で仕入れや管理を行う形態の店。	
ベストセラー	ある期間に一番よく売れた本。	
巻数もの	ひと続きのシリーズもの。	
委託	ゆだねること。まかせること。	
返品	品物を返すこと。	
納品	品物を納入すること。	
相殺	差し引きゼロにすること。帳消し。	
不良在庫	売れる見込みのない品物。	
検索	必要な事柄を探し出すこと。	
値崩れ	価格が急に安くなること。	
右肩下がり	下降傾向が持続すること。	
あとを絶ちません	いなくなりません。	

逆行せざるをえないのか——反対の方向に向かわないではいられないのか

〔問題 1〕

いのか

股にかけて—— 広くとび回って

〔問題 2〕

「同じ本」とあるが、ここではどのような意味で使われているか、四十字以上五十字以内で答えなさい。

「それなのに、新しく古本屋を始める人は、今もあとを絶ちません。」とあるが、古本屋を始める理由を筆者はどのように考えているか、文中の言葉を使って五十字以上六十字以内で答えなさい。

〔問題 3〕

「古本屋の大変さは、自由さと裏表です。」とあるが、新刊書店と古本屋の大変さをそれぞれまとめ、あなだが開くとすればどちらにするかを、理由をそえて四百字以上四百五十字以内で書きなさい。

なお、次の《注意》に従って書きなさい。

《注意》

段落をかえたときの残りのます目は字数として数えます。

ただし、問題 1・問題 2 は、一ます目から書き、段落をかえてはいけません。

、や。や「なども、それぞれ字数に数えます。